

論文要約

論文名	日本企業における社員食堂の機能と変遷 -福利厚生の視点から-
氏名	福本恭子
<p>本論文は、日本企業の社員食堂について、明治以降から今日に至る歴史的変遷からその機能が高度化していることを明らかにしたものである。社員食堂には食事の機能の他、付加機能として健康管理機能・コミュニケーション機能・知識創造機能があることを抽出した。食事の機能については、生体調節機能から健康管理機能に変化しつつあることを企業の代表的事例および企業インタビュー等で検証し、現在ではコミュニケーション機能が注目され始めていることも示した。さらに、今後は知識創造機能が付加される可能性を指摘したものである。社員食堂は福利厚生の一環として、戦前、戦後をとおして法定外福利として位置付けられており、企業の裁量に委ねられている。これをコストとして捉えて社員食堂を削減するか、労働者が職務遂行中での昼食時間は、職務遂行への影響や心身の健康などその果たす機能は大きいことを認めて戦略的に活用するかは、企業の従業員に対する姿勢を表わすものである。</p> <p>このような背景を踏まえて、本論文では日本企業における社員食堂を福利厚生 of 視点から分析し、新たな機能を付加する必要性及び可能性を指摘した。</p> <p>第1章では、福利厚生における社員食堂の位置づけを行う。福利厚生は賃金とは別に給付される企業の人事制度を構成するサブ制度であり、歴史的変遷から分析すると企業の裁量として社員食堂が設置されてきたことを明らかにした。</p> <p>第2章では、社員食堂における健康管理問題を取り扱う。健康管理問題は、労働安全衛生法に位置付けられるが、社員食堂は歴史的変遷において、業務上の疾病や怪我にも関係してきた。労働者の身体に直接影響を与える食事を扱う社員食堂としては、現在の健康管理的観点から、健康管理を社員食堂と関連付けていく必要があることを論じた。</p> <p>第3章では、社員食堂の役割を考察する。社員食堂は食事を提供する食事の機能が第一にあるが、すべての労働者に生活保障の意味で提供された戦前と比べ、現在の社員食堂は他の飲食店等も含めた選択肢のひとつであるから、社員食堂の機能そのものを考え直す必要がある。そのため、食事を提供する支援以外の機能について解明する必要があることを論じた。</p> <p>第4章では、社員食堂の実証研究として企業の事例を取り上げる。企業の社員食堂が、食事の機能以外に新たに提供出来るのは人間関係的な要素であり、特にオフィスの社員食堂において、人間関係の希薄化を補足するために、社員食堂を利用してコミュニケーションの不足を解消しようとする動きがあることを事例・企業インタビュー・アンケート調査を通じて検証した。</p>	

第 5 章では、社員食堂の機能には食事の機能以外に付加機能として健康管理機能があり、さらにコミュニケーション機能、知識創造機能を付加する必要性及び可能性があることを明らかにした。食事を媒介に労働者の身体的な栄養改善に作用するだけでなく、労働者間の交流を図り、社員食堂を利用して革新的なアイデアの創出に作用する社員食堂の付加機能には、福利厚生として位置づけられる社員食堂を超える企業ニーズが高まっているものと解釈できる。